**鈴木静一先生と私**

**近所のおじさん**

私が幼いころ住んでいたのは、池ノ上という井の頭線の小さな駅の町でした。

我が家の真向いは、ドイツリードの歌の先生メリー・クレーマーさん一家のお宅でした。一日中「ア～ア～ア～ア～ア～～」と発声練習の声が道を隔てて聞こえてきました。

そのお隣、我が家の斜向かいに映画音楽作曲家の鈴木静一先生がお住まいでした。鈴木先生のお宅には、いつも偉そうな映画界の方々が出入りしていました。

小学校の低学年になり、そのクレーマー先生に歌を習いました。呼吸法や筋肉の使い方、発声など本格的に教えていただいたのですがマスター出来なかった記憶があります。

高学年になって比留間きぬ子先生にマンドリンを習うようになりました。

時々マンドリンを持ってプ～ラプ～ラ帰ってくると、鈴木先生に声をかけられます。

「マンドリン楽しいかい？頑張ってね！」と励ましてくださるのですが、私にとっては何だかおっかなそうな近所のおじさんで、「ハイ！」と返事するのが精一杯でした。

**カラーチェのマンドリン**

私が生まれる前からマンドリンが我が家にはありました。

父の話「就職してすぐに樺太へ行くことになり、赴任手当をもらったのだけど、どうしても当時のモダンの象徴のマンドリンがほしくて買っちゃったんだよ・・・」

父は手に入れただけでほとんど弾かなかったようです。

私や弟は中が楽器だなんてことも知らず、真っ黒いクジラにまたがって海の上にいる気分になって遊んでいました。

当時大学生だった10歳年上の兄が、マンドリンを弾いてみたくなって、比留間きぬ子先生の弟子に入門したのがきっかけで比留間先生とのご縁が始まりました。

兄はとても研究熱心な人でしたから、作曲家鈴木静一先生、小説家里見弴さん（比留間賢八の弟子）が近くにお住いのこともよく知っていました。

**比留間きぬ子先生**

NHKテレビの実験放送に比留間マンドリンアンサンブルが出ることになりました。

「子供の姿が入っている方が親しみやすくてよいのではないか？」

という先生の発想から、姉と私と弟の3人でトライアングル、カスタネット、タンバリンで大人の皆さんと一緒に参加しました。

曲目はクシコスポストです。指揮をしている比留間先生は溌剌としていて眩い素敵な女性でした。

そのころ先生はマンドリン教室の児童科を開きたいとお考えだったのです。

**「みっこちゃん、マンドリン弾いてみたくない？」**

この比留間先生の一言が私のマンドリンへの道の始まりです。

高校生になったある日、比留間先生の使いで鈴木先生のお宅に伺い、台湾演奏旅行で使う楽譜の件でお願いをしてくることになりました。

ドキドキしながら呼び鈴を押しました。

小さな声でどぎまぎしながら用件を伝える私を、鈴木先生は素敵な奥さまと二人で優しく迎え入れてくださいました。

「な～～んだ！　普通の優しいおじさんじゃ～～ん！」と思ったことをよく覚えています。

父が買ったマンドリン（カラーチェ1924）は、その後鈴木先生が亡くなる直前まで手元に置いて使ってくださいました。

今は、片岡マンドリン研究所にあり、日頃のレッスンに使っています。

**鈴木静一先生**

映画界から少しずつ手を引かれ、若かりし頃の夢を実現すべくマンドリン界に復帰されました。

私は独奏コンクールに挑戦しようと決めた前年の夏ごろから、一日中一心不乱に練習していました。

クーラーなんてないので窓は開けっぱなし、近所迷惑お構いなしに大きな音を出していたと思います。

電話が鳴りました。「鈴木先生から電話だよ～～！」びっくりです。

怒られるのかな～～？と電話に出てみると

「・・・・・あそこのところ、もっと間を取らないとだめだよ！」

とのお言葉、外から聞こえてくる私のマンドリンの音に我慢しきれなかったのですね。

今思うと本当に幸せなことでした。

比留間先生にしか教えていただいたことのない私に、違う角度から音楽を作ることを教えてくださった初めての先生でした。

だんだん頻繁に行き来するようになりました。

「みっちゃんはどんな音楽が好きなの？」と聞かれ

「今はドビュッシーのピアノ曲にはまってます。」

と答えると、数か月後に編曲された曲が演奏されていました。

兄がギリシャで買ってきたCDや楽譜を「我が家に置いておいても、役に立たないから先生使ってください。」と差し上げると、忘れたころにギリシャ風の音楽ができあがっていました。

そのころの鈴木先生は、新しいアイデアがどんどんメロディーとなってあふれ出てきていたのだと思います。

新曲ができると必ず「ちょっと弾いてみて弾きにくいところあったら教えて・・・」

と呼ばれ、目の前で一通り弾いてみて「この部分ちょっと難しいかもしれないです。」

「これでどう？」すぐに手直しされていきました。

先生の楽譜は優しくはないかもしれないけれど、弾くのが不可能なところは、ないと思います。

「誰もが楽しめるように」が先生の第一条件でしたから・・・

**第1回日本マンドリン独奏コンクール**

1968年１月、岐阜市民会館にて開催されました。

田中常彦、小西誠一、鈴木静一、高橋功、鳥井諒次郎、中野二郎、服部正、の各先生方が第1回全日本マンドリン独奏コンクールの審査員でした。

主催は岐阜マンドリンオーケストラ＆フレット社主宰の伊東尚生先生です。

独奏者を育てなければ日本のマンドリン界が発展しないとのお考えから、私費を投じて開催してくださいました。

その年の12月、フレット社主催ではNHKも大手新聞社も公の機関も動いてくれないことから、日本マンドリン連盟を立ち上げることになったのです。

第1回日本マンドリン独奏コンクールが開催された1968年１月14日、当時マンドリンのプロとして歩み始めていた私は、第1位というタイトルを得て、未来に勇気と夢を与えていただき、忘れられない1日となりました。

**「主題と変奏」～故郷による～**

私が結婚することを報告すると

「僕は披露宴には出られないけれど、お祝いに曲を書こう！」

とおっしゃって書いてくださったのが、**「主題と変奏」～故郷による～**です。

私が先生の目の前にマンドリンをもって座り、音にしながら作曲されていきました。

私自身一番よく弾いていた時期でもあり、先生の頭のなかはイメージが膨らんでいき、どんどんページ数が増えていきました。

この曲は、最初のリサイタルの1週間前にできあがり、東京、九州、岐阜などで演奏しました。

先生に喜んでいただいたこと、その時の先生の笑顔は今でも忘れられません。

**最後に**

こんなに鈴木先生の作品を愛している人がいっぱいいること嬉しく思います。

「鈴木先生、良かったですね！

鈴木先生の作品を、今もなお、心から愛する皆さんが、楽しんで、燃えています。」

この素晴らしい音楽と、熱く燃える心が天まで届きますように・・・・

演奏してくださる皆様、聴きにお越しくださるお客様とともに、今日の熱き心と美しい音楽を鈴木先生にプレゼントできることを幸せに思います。

実行委員山口章太さまより、鈴木静一先生と自分のことを思い出す機会をいただいたことに心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。

　　　　片岡道子